

り、シベリア引揚げ復員学徒に対する企業の門戸は、極めて狭くなっていた。これは企業の人事担当者の「触らぬ神に祟りなし」の狭い考えと、人を見る目の自信のなさを示すものであったが、当時の社会情勢としてはやむを得ないことであつたかもしれない。何回かの就職試験に門前払いを食わされた後、東京駅前にある不動産会社に入社できた。

四十六年余の勤務で、何とか人並みの暮らしはできたと思うが、平成九年七月、無事リタイアをした。

引揚げ後、とうとうロシア語を生活の糧として使うことはなかった。数年前から老妻と年一、二回のヨーロッパ旅行を楽しんでいる。ここではつたない英語を使うが、何とかなっている。

しかし、私の英語会話とロシア語会話では、基本的に異なっている点があることに気付いた。それは外国で英語で話す場合は常に考え考え、言葉を探し口に出しているが、ハ爾浜学院のクラス会で出るロシア語の場合は、何も考えないで出てくるということである。

戦後再びハ爾浜を訪問する機会をまだ得ていない。

しかし時に、石畳の道と楡の並木、美しいロシア正教寺院の町、そして郊外の大草原、洋々と流れてきて流れて去る大河、松花江など思うとき、ふと口にでるのはハ爾浜学院の寮歌の一節である。

「……興安の嶺風あれて、バイカルの波騒ぐとき、ウラルの嶺に月もなく、迷える羊此処彼処、嗚呼混沌のこの時に……」

亜州白山郷開拓団顛末記

石川県 西田 武

入植の動機

私は、大正八年九月四日に石川県石川郡鳥越村の農家に生まれ、昭和十三年の秋、徴兵検査を受けたが病気のため不合格となった。当時、日本は支那事変がだんだんとエスカレートし、戦時体制のもとにあったので、お国のために働けなくなったことは大変ショックであった。同級生はみんな軍隊に入って、国防の第一

線で日夜頑張っているのに、私にそれができないことは残念なことであった。

何か意義ある仕事をしたいと考えていたところ、ちょうど石川県の鳥越村、吉野谷村などの近隣の村々から約三百人が、満州の黒竜江省富裕県に亜州白山郷開拓団として入植していた。国が計画した満州開拓に参加して五族協和の旗印のもと、未開の広野で原住民と協力して開拓に従事することは本当に意義あることで、お国のためだと思い、自分も開拓団に入団することを決心した。

昭和十四年三月、兄と共に石川県羽咋郡にある徳田訓練所に入所した。同年四月十五日、所定の訓練を終了して神戸港より出航し、大連、奉天、四平街等を経由して齊齊哈爾の白山郷分遣所に無事到着した。

我々一行七十人は、直ちに目的の白山郷開拓団に入植、その日は先遣隊の盛大な歓迎を受けた。一夜明けで見渡す限りの大平原、山一つ見えない殺風景さに一抹の寂しさと不安を感じたが、他面満州の広いのにはただただ驚きだった。

翌々日より直ちに作業分担を受け、私と兄は建築班に属した。そのとき建てた建物は、後日団の購買部として活用されたが、建築中の四月二十四日、棟木に上り作業をしていたとき、突然大竜巻が起こり建築中の建物が崩壊し、兄は前歯四本を折り、私も肋骨を折る重傷を負った。

当時、団医として赴任されたばかりの九州出身の田中近則医師の手厚い治療を受け、ようやく二カ月余りで快方に向かったが、先生は「君はまだ、重労働に耐えられんから、わしの助手になって病院で働いてくれ」と申された。これが私の将来を定める一因となった。

毎朝六時半起床、朝食の準備、診療室の掃除等を経て朝食、そして九時より診療開始、午後は往診という日課だった。現地は水質が悪く、団員のほとんど全員が風土病にかかり、随分と悩まされたのである。

また、私は先生の熱心な指導のもとで、調剤や外傷の手当、看護士の役割などいろいろと実地について多くを学び、二年目からは代診に出られるようになり、医学の原理を修得して将来は医者になりたいと思うよ

うになった。他面、赤い夕日の沈むころ、時折祖国日本、そして我が故郷の山や川、両親のことなど思い出して無性に寂しく溜め息の出る日もあった。

団の組織と建設状況

先遣隊および本隊の合同で、本部、病院、学校、神社や個人住宅の建築も着手された。昭和十六年より建設効率を上げるため六部に分かれていた組織を、一と二が一部落、三と六が一部落、四と五が一部落と計三グループに編成して、建築と農耕に一段と成果を上げた。神社も落成したので、郷里の石川県白山此咲神社より御神体をお迎えして、賑やかにお祭りもできた。開墾もトラクターでどんどん進み、農作業もはかどり待望の水田も軌道にのり、十九年にはお米もとれるようになり、団員一同歓喜に満ちて、その豊穡を心より喜んだ。

しかし、戦争がますます激しくなり団員も次々と召集されて、夫は兵隊に、妻は三、四人の子を抱えて不安な毎日を過ごすようになってきた。最後の召集は二十年八月十五日で、団の男という男は根こそぎ動員と

なって齊齊哈爾兵団へ入隊した。そのときの心境はとも筆舌に尽くし難いものであった。

終戦

昨日まで平穏だった白山郷も、一変して不安な状況に変わった。三部落より往診の帰途、私は亜州屯の屯長と出会ったが、そのときの屯長の言葉遣いや態度が今までと全く変わり、「西田！ 日本は戦争に負けた。日本人は満州から引き揚げねばならんから牛、馬、豚など全部私に売りなさい」と言うのである。だがそれはおかしいと、半信半疑で聞きながら病院へ帰り、本当かどうか胸の動悸が治まらず、心配のあまり本館前に様子を見に行ったがもう日没時刻だった。そのとき、ふと竜安橋の方向を見た途端、火の玉が飛んでくるように見えたので、ますます不思議に思い、目を凝らして見ていたところ、今朝最後のお別れをして送り出した召集兵一行全員が帰ってきたのだ。「どうしたのだ」と声をかけると、「戦争が全面降伏で終わったので帰ってきた」とのことだった。実に悔しく残念なことだったが、団にとっては残り少ない男性が帰ってきたこと

で、一同は心強い気持ちでいっぱいだった。

しかし、日一日と現地の状況は不穏な空気に包まれていく中、斉斉哈爾へ様子を見に行った団員の報告によると、ソ連軍の進駐で市街は略奪暴行で大混乱状態とのことだった。しかも、辻藤団長代理によると、原住民の敗戦を知った者たちが、我々の弱点をついて様々な無理難題を申し入れるようになってきたと言っていた。

一方、副团长と各团长らとは様々な重要会議があったと思うが、団員には何の話もなく、すべて秘密裏に行い一切公表されなかった。よって団員間では、「折角苦労して育てた農作物だから、収穫してから団の方針を定めてもよいのではないか」と言う声もあった。

八月二十三日、使用人の苦力頭が朝早く私の家にやってきて「大人、大人、今晚三部落へ匪賊が襲撃に来るから、牛、馬、豚を全部放っておけ」と告げてくれたので、これは大変なことと思って本部へ連絡、応援を求めたところ、本部も手薄だからみんな一時本部へ避難するようにと言われた。早速、三部落にその旨を連

絡したところ、みんなは本部に集まるのも各区に集結して警戒するのも何ら変わらないと言う。意見の食い違いで、やむを得ず私の区の六世帯だけが身の回りの品だけ馬車に載せて本部に避難したが、二回目の荷物を運ぶときはすでに日没であった。

もし、苦力頭の情報が本当だったらと、各区に集結している二部落民のことが心配になり、私と兄と宮川氏の三人で話し合って応援に行くこととし、本部を後に日暮れの道を五〇メートルぐらい進んだところで何やら異様な物音に気付いた。何だか泣きわめくような声ではないかと三人で話しているうちに、段々と接近して来るので「オーイ、どうした、どうした」と呼んだら、その人たちが「今、匪賊にやられた。加藤権次郎、操、笹木光男の三人が撃たれて死亡、お金や貴重品を全部強奪された」と言っ命からがら本部に引き揚げてくる途中であった。そこで、早速团长に報告したところ、团长も事態を重く考えて、即刻各部落に非常呼集をかけた。二十四日朝方までには全員本部に集結を完了した。

八月二十四日午前十時ごろ、県の公安隊が武装解除に来団し、武器、弾薬、刀剣と公共財産の引き渡しを要求してきた。同時に男子全員を本部前に整列させ、「個人の生命・財産は保証する。公共財産はすべて即刻引き渡すように」と重ねて要求をした。一方、団の年寄りたちは「日本が本当に負けたのか？ 真相がもつとはつきりするまで、保留した方がよいのではないか」と言う。一部の団員とのトラブルもあり交渉はいったん物別れとなった。

翌二十五日には、公安隊が再度来団し公共財産の引き渡しを強く迫ったので、私共は「一刻も早く引き渡しして斉斉哈爾へ引き揚げたほうがよいのではないか」と意見を述べたが、聞き入れられなかった。

再度、銃砲・刀剣の引き渡しについての要求があったなかで、六部落の吉田さんが空気銃を持っていたことを密告され、吉田さんは破損したので捨てたと申し出たが、信用してもらえずに大変なリンチを受けた。皆の気持ちは極度に動揺して不安になっていった。

折も折、三部落で襲撃を受けた畠山さんたちが丸裸

になっているとのことで、毛布や被服の大量支給の要求があったが、太田倉庫係との間で、「渡せ」「渡せぬ」でトラブルが起きた。一方は「いつ死ぬか分からぬ者があまり欲張るな」と言い、他方は、「お前ら日本人らしくいつでも死ぬのか」と口論したが、皆が止めていったんは収まった。しかしそのとき、太田さん、山内さんたちが「わしら、二十六日の晩、皆より一足先に死んでみせる」などと冗談めいたことを言っていたことが何となく不可解に思われていたので、山内新喜さんが家に戻ったと聞き、早速に北さん、兄、私の三人で山内さんの家に行き、焼身自決なんてそんな早まったことをするとは、なんとしても思いとどまるようにと説得に行った。夜中の三時ごろだった。ところが、山内さん、北野さんの一家やその他の人たちも「西田さん、北さん、白山郷在住中はいろいろとお世話になりました。ありがとう。わしら一足先にあの世に参らせてもらうから、後をよろしく」と暇乞いとまごいされたので驚き、「皆さん、早まったことをしてはなりませんよ。皆で力を合わせて斉斉哈爾に行きましょう」

と、手を取り合い、思いとどまるように泣きながら説得して、いったん本部に引き返し、事態を見守ることとした。

そうしているうちにも、土匪の略奪暴行が段々と激しくなり、本部にも乱入するようになって、あちらこちらで小競り合いが起きて大変に不穏な状況となった。だが、先ほど説得に行った山内さんたちのことが心配になり、遠望台に上って山内さんたちの家の方を見て、びっくりした。もうもうと煙が上りだしたので、まさかと思いつながら兄たちと駆け付けたところ、時既に遅く、家の中は一面の火の海であった。家の中に燃料用野草をいっぱい詰め込んで火を放ち、山内さんら七家族二十七人がついに悲惨な焼身自決を遂げていた。このような状況を目の当たりに見て、自分たちもいよいよ最後のときは、このような死に方をせねばならぬのかと悲しい思いがした。

こうして日一日と孤立状態になってきた。翌二十七日早朝に、国民学校の玄関前に一同が集まり、最後の話し合いが行われた。その内容は、斉斉哈爾へ脱出す

るか、このまま団に残留するか、どちらを選ぶかの話し合いであった。種々議論を重ねたが結論に至らず、やむを得ず私は、自由行動を提案した。出征者の家族は全員斉斉哈爾へ決死の脱出を希望した。「西田さん、私たちも連れて行ってね」と哀願する婦女子たちに、「お互いに力を合わせて脱出しようね」と誓い合ったが、そのときの光景が今に至るまでなお、目に焼き付いている。

残留するという人たちとの別れの酒盛りを始めたが、飲む酒は苦く、豚肉は堅くてのどを通らぬ状態だったが、老いも若きも酔い崩れて平常の失言をわびたり、過去のことを泣いて懺悔し合ったりしていた。

事態が刻一刻と悪化していくなかで、青年学校生徒で決死隊を結成し、小室校長を隊長に竹田義久以下十九人で編成した。その壮行式を行っているとき、略奪に侵入してきた土匪を二人殺すという事件が起きた。そのとき、学校の南側に公安隊が、北側に土匪が銃を構えていたので、辻藤団長代理が交渉に行こうとしたところ、小室校長が「僕が行ってくる」と駆け足で校

門を出て二〇メートルほど進んだところで、土賊から一斉に撃たれ体全身に銃弾を浴びて即死した。

それをきっかけに、両側から弾が雨霰の如くに撃ち込まれてくるので、私たちは学校内に避難しようとして右往左往しているときに、米村さん、奥村さん、宮井さんなども銃弾を浴びて倒れてしまった。教室内に入ってみると、男も女も決別の酒で狂ったように泣く者、喚く者、諦めの境地で合掌している者、様々な姿があった。

しかし、私たちは脱出の望みを捨てずに、窓際に待機していた。すると、急に廊下が騒々しくなってきた。様子を見にいっただれかが石油を廊下に撒いて火を付けたらしく、各教室はみるみるうちに火の海となり、苦しさで逃げ回る人々の姿は生き地獄さながらの様子であった。兄の家族も私の妻子もそれぞれ窓硝子を破って外に逃げたが、あまりにも弾が激しく撃ち込まれてくるので、玄関の方に逃れてみたが、そこにも土匪が黒山のように押し寄せていた。脱出のチャンスをなかなかつかめないで、また校内に入りかけたが、子供

たちが「苦しいので外に出たい」と泣きわめく。再び玄関先に戻ったところ、土匪が待ち構えていて、女を連れ去ろうとしていた。びっくりした兄嫁が、子供三人と一緒にすぐ横にあった井戸に飛び込んだ。これを見て私の妻子も続いて飛び込んだ。校内から全身に火傷を負った人々が逃げ出してきた。山本さんも井戸に飛び込んだ。

そのとき、宮川彦二さんと兄と私の三人は、「家族たち皆は、井戸からあの世に参らせてもらった。自分たちが最後に死にしようが思い残すことは更がないが、最後の最後まで望みを捨てずに頑張ろう」と話し合った。校舎の裏側に回ったら、校舎から脱出してきた子供たち二十人ぐらいが逃げ場を失って困っている状況だった。一時間余りたってもなかなか撃ち方がやまないで、「もう駄目だよ！ 弾に当たって死ぬのう」と言って皆で両手を広げて、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と唱えながら弾の飛んでくる方向へ進んで行った。まず笹木進次が大腿部を撃たれ、続いて宮川彦二が心臓部を撃たれて即死したので、次は自分

の番かと念仏を唱えながら進んで行った。

公安隊と二十メートルぐらいい接近したとき、急に射撃がやみ、「西田！ 西田！ 来々」と手招きをしている者がいた。横にいた兄に、どうなってもよいから行ってみようと二人で進みかけたら、「駄目、駄目、お前一人でこい」との合図だったので、私が一人投降するような格好で近づいた。行ってみると、公安隊の隊長はかつての富裕県厚生課勤務の張さんという朋友であった。そして彼は私に「大変ご苦労さん」と同情の言葉をかけた。私は「日本が戦争に負けた結果だから致し方ありません、あなたの鉄砲で私を撃ってください」と頼んだが、張さんは「駄目、駄目、友達がいるかぎり今から撃つのをやめるから、生き残った者を全部集めて、君が責任者になって日本に引き揚げなさい」と言った。また「君の団長が、我々の言うとおりに公共財産を引き渡して、早く斉齊哈爾に引き揚げればこんなことにならないでもよかったのだ」とも言ってくれた。

話が終わってすぐに、私はまず井戸に飛び込んだ人

たちを早く助けようと井戸に駆け付けた。まず、兄嫁をろくろで巻き上げ、次いで山本さんが上ってきた。

次には我が妻も上がってくるものと信じて、「早くロープにつかまれ」と怒鳴ったが全然反応がなく、なんとなく不吉な予感がして、必死で巻き上げて二メートルほど巻いたが手ごたえが全然なかった。助け上げた二人も唇を真っ青にして震えている。そこに土匪がきて二人を取り合っているので、これは大変とばかりに木刀を振り回して、二人を公安隊のいる所まで助け出した。再び妻子を助けようと井戸のところに行って呼んだが、何の応答もなかった。本当にかわいそうなことをしたと、泣くに泣かれぬありさまで、かわいい妻子との悲しい別れであった。この悲しい心の痛手は、生涯私の脳裏から消えることはないだろう。

朋友の張さんは、戦時中に配給の煙草や石鹼をあげたことに対して好意をもっていてくれたため、私たちが助けてくれたのだと思っている。人間誠実であれば、国籍・人種が異なっても人柄は変わらないものにつくづく感じたものであった。

齊齊哈爾での難民生活

やつのことで校舎から逃れることのできた五十人余りの生き残りを、竜安橋駐在所までトラックに便乗させてもらい、そこで一泊して、翌日の朝、馬車二台に負傷者や子供を乗せて出発させ、大人は歩いて齊齊哈爾に向かって行軍した。万感胸に迫る悲しい行軍だった。やつの思いで齊齊哈爾に着いたときは真夜中で、駅前の満拓公社の事務所に一応落ち着いた。

それから、いよいよ難民生活が始まり、ソ連軍の物資輸送の使役に駆り出されたり、また生活のためにボン菓子の製造販売やアミノ酸醬油製造などいろいろなことをした。毎日の食事は黍の原穀を一度炊いて灰汁抜きし、更に二度炊きしたものを常食として、一年間命をつないだが、よくも生きてこられたものだとなんて感心している。

それにしても、私が白山郷にいるときには、一日も早く齊齊哈爾に行くことを強く主張したが、残念ながら私の力不足で実現せず、ついに百二十余人もの死という悲惨な結果を招いたことは、誠に悲しく残念なこと

とであった。人の運命は、何が幸いし、また何が不幸になるか分からない。白山郷の同士は誠に悲しい最期であった。

満拓公社の事務所から満鉄社員社宅に移り、いよいよ冬越しの準備にかかった。まずは、齊齊哈爾駅構内に落ちている石炭を拾い集めることから始まった。作業に余念がない十二月初め、日本人会に呼ばれたので何事かと行ってみると、「奥地から避難民がどんどん引き揚げてくるので、齊齊哈爾だけでは収容しきれないから、白山郷の人たちは全員奉天に南下してもらいたい」という話だった。

しかし私は、「せっかく越冬準備もできているので」と断ると、「それでは会としても誠に困るから、団員と相談してみてください」ということになり、やむを得ず社宅に戻って団員に相談したところ、大半の団員が奉天行きを希望したので、致し方なく私とけが人とその家族十人がここに残ることとし、他の団員四十人が十二月十一日に齊齊哈爾を出発して南下し、二日ばかりで奉天に着き、鉄西の収容所に入り、越冬生活が始まっ

たのである。しかし、ここ齐齐哈尔とは比べものにならないほど生活条件が悪く、集団雑居生活で、衛生状態も極度に悪く発疹チフスが蔓延して、団員のほとんど全員がかかって、半数近くの人が死亡したということだった。

齐齐哈尔に残った私たち十数人は、なんとか無事に越冬することができて、翌年の昭和二十一年八月上旬に奉天まで南下し、九月下旬にコロ島に集結した。

コロ島で約半月の待機生活の後、十月上旬にコロ島から引揚船に乗り、十月十五日、懐かしい博多港に着いた。入国手続きを済ませて、一路夢にまで見た我が生まれ故郷鳥越に帰り着いた。

齐齐哈尔で別れて奉天に行った四十人の団員のうち生き残った約二十人は、私たちより一足先に帰国していた。

引揚げ後の生活

引き揚げた後も、また一苦勞であった。郷里は山間地であったため野山の手伝い仕事をしてきたが、将来のために、何かよい仕事がないかと石川県の厚生部援

護課に相談に行ったところ、金沢市郊外に働き場所を世話していただき、そこでしばらく働いていたが、なんとかして独立したいと考えて、昭和三十年に現在の金沢市塚崎町に居を構え、無茶苦茶に働き用品雑貨商を開業し、再婚して子、孫と七人家族になり、皆健康で今日に至っている。しかし、富裕県から引揚げの途中で自決した人々や病死した人たちなど、悲惨な最期を遂げた人のことは一日も忘れたことはない。

金沢市野田山墓地にある「満蒙開拓者慰霊碑」に、毎年七月の第一日曜日、同志の追悼法要を行い冥福を祈って今日まで五十余年。これは我々一代、遺族が生きている限り供養を続けようと、生前お互いに誓い合った約束事である。

また、私は昭和五十五年八月二十八日、引揚げ後初めて集団自決の現地に行き、その後六回にわたり現地法要を営んできた。

平成九年も七月二十四日より八月一日までの日程で、鳥越村の板倉武雄村長を慰霊訪問団長として十九人が現地に行き法要するとともに、六年前から申し出てい

た慰霊碑建立がやっと許可になったことにより、白山郷開拓団の居住地跡に「日中友誼記念碑」を建立して、盛大な除幕式も行うことができ、大変に感激した次第である。

現地では、鄒淑琴という我が団の孤児の女性が、いつ行っても出迎えてくれる。両親と別れ別れになったのが七歳ぐらいのときで、当時のことや日本語は全然分からないが、今回の法要にも長男と出席してくれた。これからも、命のある限り日中友好親善に一層尽くしていきたいと、心から決意をしたものである。

国破れて惨禍あり

無法者に踏みにじられて

愛知県 大野 年 子

夢を抱き満州へ

昭和十六年一月二日、一宮駅から親族・友人に見送られ、夢と希望に胸膨らませ出発しました。

主人は、既に二年前から国費で新京国立法政大学の興農部に籍を置き、勉学中でした。渡満して驚くことばかり。零下三十度という寒さ、戦時下の日本の軍隊色に見慣れていたのとは大違いで官公庁の立派な建物、満鉄。広い道路をマーチョに揺られながらの楽しそうな風景は、王道楽土にふさわしい静かな街でした。

故郷を離れ知人もなく不安でしたが、日本人が多く、また官舎の方々ともすぐ親しくなり、毎日が楽しい幸せな日々でした。父も故郷の状況などを知らせてくれるし、私もできる限り父母に心配かけぬよう手紙を書きました。

昭和十八年六月一日、新京の病院で長男達郎を出産。早産だったので、心配して父が見舞いにきて初孫に会い、喜んで帰りました。そのころの一宮地方は、軍需工場の多い名古屋近辺なので、既に空襲は激しく、そのため防空壕を掘り爆撃に備えているというところでした。日本は神国だから必ず勝つと軍国色で育った私は信じていました。しかしそれから二年後にソ連軍の侵攻で平和は一瞬にして崩れ、想像もつかない激動の日々